読書のみちしるべ

「一俗六仙」の境地

清水建設社長
経団連人口問題委員長
井上 和幸（いのうえ かずゆき）

私が尊敬する経営者の1人に日立製作所元会長の川村隆さんがいる。この「一俗六仙」という聞き慣れない言葉は、彼の著書のタイトルである。経団連の副会長を務めておられたので、この本を読まれた会員企業の方も多いと思う。書店で見た、この4文字タイトルに興味が湧き、一気に読みふけったのを記憶している。著者の人柄と仕事や会社、そして人生に対する考え方に触れ、静かな感動を覚え、私の人生観・仕事観にも少なからず影響を与えていただいたような気がしている。

「一俗六仙」とは、1週間のうち1日を仕事（俗）、6日を趣味（仙）、という割合で過ごしたい、ということである。巨大艦隊日立の立て直しに全力で立ち向かった企業戦士のような方かと想像していたが、私のイメージとは正反対に、その考え方は崇高で機知に富んだものであった。と同時に実に博識であり、緻密な洞察力、観察力そして分析力を持った方であった。

もちろん、我々経営者は現役の時代は「一俗六仙」とはいかない。著者もそうであった。しかし、日立を退任された後、東京電力の会長も引き受けられ、その間、企業人として徹底的に働きがいを追い求めた一方で、心のどこかでは人生の生きがいもひそかに探究していたのだと推測する。

翻って自身の人生を考えてみると、いまだに「俗」の世界ばかりで悪戦苦闘していて、いささか情けない。週末のゴルフや歌舞伎、オペラ、バレエなどの観賞、河東節（かとうぶし）のお稽古などは「仙」の分類に入れていいのだろうか。もっと自由に、企業人としての制約なく社会や地域に貢献する時間を取れればと思う時もあるが、周囲がそれをすぐには許してくれないであろう。「俗」の世界で生きつつも、川村さんのように「仙」の境地をひそかに探究していきたいと感じている。そして将来、一切のしがらみから解き放たれた時、ごく自然に「仙」の活動をスタートさせたいと思う。

人生にはいろいろな「やりがい」がある。仕事におけるそれは「働きがい」だ。一生において大変重要な要素だと考える。社会人になってがむしゃらに「働きがい」を求めてきた。間違いなく、自身を成長させてくれたし、何ら後悔はない。しかし、人生の「生きがい」は違う。

見返りを求めない社会貢献、子や孫と過ごす時間に何気なく感じる幸福感、純粋にもっと学ぼうとする学習心。そうしたことに「生きがい」を見つける「仙」の時を模索しようと思う。

だから、最近の若い社員にも折に触れてこう言っている。「皆さん、『働きがい』と『生きがい』は違うよ。1度しかない自分の人生だから2つを求めて、全力投球しよう！」と。